でまかせディスカッション

民主的な街づくりのユートピア

文：難波優輝

イラスト：ハルアキ

「ミキちゃん。二〇二〇年からの新型ウイルスの影響で公共交通はどうなったかしら？」会議室へ向かう途中先輩がわたしに急に質問を振る。

「え、えと、赤字続出、必死のコスト削減、従業員のリストラ、体力のない地方の赤字路線は次々に消滅……ここ中村市も含めてです」

「でも交通は赤字だろうが誰もが必要とする。そこでどうしたの？」

「そ、その、交通政策の民主化です。え、えと、二〇二二年から、交通事業者や自治体のオープンデータ化が推進され始めました。市民誰もが都市や交通のデータを使って、Cyber-PoCで可視化・シミュレートして、施策を提案できるように。必ずしも商業に限定されない持続的で市民主体のボトムアップ式の交通……とはいえ、自治体はお金も人手もデジタルを活用するスキルも不足しています。だから市民や民間に頼る。それをいい感じの言葉で表現したのが『オープン化』や『ボトムアップ』というわけですが……」

「満点」

先輩はきりっとした表情を崩してウインクした。先輩の期待に応えられたみたいだ。ほっと

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.

すると同時に、ついその微笑みに見惚れる。中村電鉄の入社一ヶ月目にして、わたしは先輩に淡い憧れを抱いていた。カッコカワイイ……推せる……！いまだに仕事以外で話したことないけど……。

「次は実践ね」

「は、はい？」

会議室に着くと、配信スタジオのようだった。本格的なマイクとミキサーがパソコンに接続されている。会社にこんな設備あったんだと感心しながら眺めていると、先輩の手に押され、椅子に座らされ、頭にヘッドセットを被らされ、コントローラーを握らされた。

「では、今日の新人研修。立派な鉄道事業者になってもらうために、ミキちゃんには交通を民主化してもらいます」期待してるわよ。と先輩は想像の中でウインクした。

Round 0

「柴犬さん初めまして。あなたは市役所の人ですね？」

「いや、あの……わたしの名前は柴犬じゃなくて、こちらに初めて伺いました者でして、あと市役所ではなく……」

「ネズミさん。柴犬さんは今日はじめてで、まだロールを共有してませんよ」

ネズミさん？画面がロードされるとわたしは驚いた。3Dのアバターが仮想会議ルームに大量に現われたからだ。猫耳、ウサギ耳はあたり前、ロボットや中村市のマスコットキャラ、あと冷蔵庫やバスに眼がついている奇妙なアバターもいた。何よりわたし自身の姿として、やけにかわいい犬耳のアバターが表示されていた。これは先輩の趣味……なんだろうか。

「柴犬さんにご説明します。ここは仮想的市民議会です。役所、商店会、バス交通、鉄道、何より各地区の市民の方に参加していただき、それぞれのニーズを共有、折衝しながら交通を作っていきます」

中村市役所まちづくり計画課役、司会のアンゴルウサギです、と名乗ったモフモフの手からわたしは「キャラクタ設定とゴール目標」と書いてあるデータをもらった。

- 交通空白地帯（C地区）の住民代表。六十歳。まだまだ車を運転できるけどそのうち難しくなることが分かっている。目標〈持続可能な交通サービスを自分の地区に作り出す〉
- 中村市役所。三十歳。中村市の持続可能性を憂慮している。目標〈人口も減って税収も減って大変だから無闇に補助金は出さない。むしろ減らす〉
- 中村バス会社。五十歳。運輸事業部。もともと運転手だったが、叩き上げで部長までのぼり詰めた。営業課、計画課などを歴任。目標〈役所から補助金獲得と売上確保〉
- 中村商店会。五十年間中村市密着でやってきたケーキ屋の二代目。カフェ事業は自分の代で

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.

立ち上げて成功。五十歳。目標〈商店街で新たな事業を立ち上げて収益源を作る〉

- 鉄道会社。二十四歳。駅に人を呼び込むために地域資源のキュレーション的な活動をしている。目標〈駅に来る人を増やす〉

……さらに細々した設定資料がついていて、まるで昔大学のボードゲームサークルでやっていたTRPGみたいだ。にしてはやけにリアルで世知辛い……。

「理想的市民議会は参加者がそれぞれ持ち寄った現実のニーズを、自分とは別の参加者の立場になって議論していただきます。より公平でそれぞれが見えていない視点に立った公共施策を立案していくためです。そして、それぞれの市民の氏名や所属は明かされません。仮面舞踏会と演劇のミックスみたいなものですね。柴犬さんにはバス会社をしてもらいましょう」

ウサギさんは時計を見る仕草をして（こちらからは真っ白な腕毛しか見えなかったが）「それでは、最初のディスカッションラウンド開始です」と言った。

Round 1

市長「アンゴラウサギです。私が市長をやります」

役所「どうもお疲れ様です。遅れてすみません。役所のフクロウです。今日はC地区の代表役のハムスターさんから議題があります」

住民「住民役のジャンガリアンハムスターです。まずはこれ見てください。うちの地区はこの通り、実は交通空白地帯になっていて、車運転ができない年寄りが身動き取れない状況です。」

役所「ほんとですね。市の統計によるとC地区は高齢率60%目前ですし、ちょっとまずい。中村バスの柴犬さん、これどうにかできませんか？」

急に振られた……！　や、やばい！こんなとき先輩だったらどうするか……先輩の微笑みを思い返しながらわたしは脳をフル回転させた。そ、そうだ！たしか、中村バスの現在の収益状況から考えると……。

バス「え、えと、中村バスの柴犬です！　Cyber-PoCで路線引いて試算してみても、人手不足です！　C地区まで新しく路線伸ばすのは正直経営的に難しいです！　補助金が欲しい！……です」

市長「中村バスさんありがとうございます。……そんなに緊張しなくてもいいですよ」

気づくと参加者の動物たちが生暖かい目で見ていた……すいません……帰りたい。

役所「えーと、い、いやいや、前から補助金は減らしたいと言ってますよね」

住民「でしたら近所同士で自分のクルマを出し合って必要なときに送迎し合う、名付けて「ご近所あいのりタクシー」をやるのはどうでしょう？その代わり、中村バスの柴犬さんのOKと

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.

役所のフクロウさんのサポートが欲しいところです」
役所「いいですね！あいタク！ 中村バスさんが可能なら、市としても中村さんバスに了承していただきたいと考えます」
バス「え、えーと。わ、われわれの売上が減る話ではないですし、いいです！」
役所「では一ヶ月試しにやってみてはどうでしょう。上手くいったらガソリン代などの少額の補助金は出すように調整するのでサステナブルにしていきましょう」

Round 2

役所「例のC地区のあいタク、Cyber-PoCで見たところ上手くいってるみたいで他の地区でもやりたいと話題になってますよ」
バス「はいっ！今回はわたしの話聞いてくれますか？」
ここだ！と思い〈売上確保〉の目標達成のためにわたしは恥を捨てて動き出す。先輩、意地を見せます！刮目してください！
住民&役所「どうぞどうぞ」
参加者の人たちがこっちをじっと見る。緊張する……。
バス「前に言った通り、いろんなエリアに路線を伸ばすのは経営的に難しいです！けど！ここ！ここの公園まであいタクで来てくれたら、駅まで路線バスが結構出ているのでよいと思います！みなさん運転距離が短くなって楽ですし、ガソリン代も浮きますし、交通渋滞もなくなりますし！バスに乗ってもらって我々は売上増、いい話だと思いませんか！？」
わたしは恐る恐る周りを見渡す。みな表情は窺い知れないのだけど……。沈黙を破ってゆっくりとアザラシアバターの人が動き始めた。
商店会「商店会のアザラシです。そこの公園に人が集まるならコーヒースタンドでもやろうかな。どのくらい人の流れができそうですかね？」
役所「えーと、A地区とB地区とC地区の人があいタクで公園に来るんであれば……はい出ました。一日百五十人くらいですね。C地区の実績によると時間帯は十時から昼過ぎにかけてが多いみたいです」
商店会「んー、それだと損益ギリギリで少し心配だな」
鉄道「これ使ってみます？弊社で使っているポップアップストアのキットなんですけど、簡単に設置できて人の流れなんかのマーケティングデータを検知できるハイテク屋台みたいなもの。少額でお試しできますよ」
役所「では公園使用許可の申請出しておきます？」
商店会「よしやってみよ！」

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.

バス「上手くいったらみんなウィンウィンですね！」

Round 3

役所「コーヒースタンドの売れ行きはどうですか？」
商店会「「あいタク」のおかげで上々です。公園の近所に住んでる人も来てくれるようになったし」
鉄道「よかったですね。うちの駅にも出してみます？」
商店会「願ったりです。よろしくお願いしますね。あなた……商売人ですね」
鉄道「ははは、駅はすっかり改札レスやらロボットやらで自動化してるでしょ？ 駅員の仕事もこういう地域資源のキュレーションとか、駅に人を呼び込むことに変わったんですよ」
商店会「何か広場とかでイベントやるときは言ってください。若いの出しますんで」
鉄道「はい、ありがとうございます。あ、そうだ、今度駅の中に物流窓口をつくろうと思ってまして。宅配が増えすぎて物流さんが困っているという話で、駅まで荷物取りにきてもらえればどうかなって考えてるんです。ちょっと住民のみなさんの意見やアイデアが欲しいんで、何人か集めて出席してもらえます？」
住民「良いですよ。場所は駅のシェアオフィスでいいですかね」

Round...

「ミキちゃんおつかれさま。報告上がってきたわよ。バス会社役で話してくれたミキちゃんの公園への集客案は実際バス会社の検討に上がったみたいよ？」
「い、いや、口から出任せだったんですが……それでもうまくいくもんなんですね」
「もちろん。すべてがうまくいくはずはないけれど。意外とアイデアはどこからでも湧いてくるもの。人間同士が互いにごっこ遊びをしていたってね。まずは話すところから始まるわけ。まさに嘘から出た真ってやつね！」
ぐっとガッツポーズをとりながらの微妙に寒いセリフも先輩の口から聞くと全然気にならない。褒められてとてもいい気分……！ わたしもガッツポーズをする。
「あとは……そうね！ 次の会議でもよく発言できたらごはん連れてってあげるわ？」
先輩はまた、あの魅惑的なウインクをした。
あれ、これは嘘かホントどっちなのだろうか……。

（終）

© Hitachi, Ltd. 2021. All rights reserved.